

日本と海外をつなぐ架け橋

岡山県立岡山大安寺中等教育学校 1年 廣田 花梨

私は昨年まで十年以上アメリカに住んでいました。アメリカでの生活は日本と全然違うところがたくさんありました。アメリカでは平日は現地の学校に通い、毎週土曜日は小学一年生の頃から日本語補習校に通っていました。補習校では新しい学年になるたびに机の上にはピカピカの新しい教科書が置かれ、私は一つ学年が上がったことを実感し嬉しくなりました。アメリカの現地校では、クラスの先生ごとに使うプリントや本が異なるので決まった教科書はありませんでした。だから、補習校でクラスのみんなが「教科書」という決まった本を用いて一緒に音読したり、違うクラスの友達とも国語のお話の内容を共有できる土曜日がとても新鮮でした。

二つの学校を比べて、私は日本や海外の日本語補習校で「当たり前」のように配られている教科書が、海外の現地校では当たり前のものではないことを実感して、私たち日本人はとても恵まれていると感じました。

この経験を通して、私は「どうして日本は教科書を無料で配ることができるのだろう。」と疑問に思いました。そして、それは「税金」に関係があることを知りました。

税金には様々な種類があります。国民が納めた税金は医療や道路の整備などに使われ、教育のためにも使われます。日本の子どもたちは国民が払う税金があるおかげで教科書を無料で受け取ることができていて、私がそうであったように、海外にいても日本にいるのと同じように学ぶことができます。これはとてもありがたいことだと思います。さらに深く調べると、それはみんなが平等に学べるように「教科書無償給与制度」と呼ばれる制度であることが分かりました。この制度には、次の世代を担う子どもたちの健やかな成長を願う国民の思いが込められていて、生徒のみんなが経済的な負担を感じることなく学ぶことができるよう国が支えているのです。もしも教科書が有料であれば、経済的な理由で教科書を買えない子どもがいるかもしれません。また、海外にいる子どもたちは母国語を用いた学習を進めることが難しくなるかもしれませんし、その結果、母国である日本への愛情がもしかしたらだんだん薄れていってしまうかもしれません。このことを考えると、教科書は海外に住む子どもたちにとって日本と海外をつなぐ架け橋のような存在になっていると思います。私はこの制度が私たち日本人にとって大切で、未来の日本にも欠かせないものだと思います。

私は海外の経験と税の仕組みを知ったことで、教科書への思いが強くなりました。日本で中学生を始めるにあたり、私は税金とそのしくみに感謝し、教科書をより大事に使っていきたいと改めて実感しています。